

「神奈川大学教育研究交流会」(2003年1月11日) 報告

2002年度主任 下田節夫

平成 14 年度「神奈川大学研究交流会」は、平成 15 年 1 月 11 日、本学出身であられる横浜市教育委員会指導主事（当時）灘邊憲司先生を講師にお迎えして、講演会「横浜市が求めている教員像について」と題して行われた。

この会は、神奈川大学同窓神奈川県下学校教職員会主催の「教育を語る会」を兼ねて開かれた。

当日は、本学出身の教員を中心に多くの卒業生と、教員採用試験に合格した学生をはじめとする在學生、あわせて数十名の方が参加していただき、盛会であった。

ご多忙中にもかかわらずご講演くださった灘邊先生と、参加してくださった皆様に、この場を借りて、改めて感謝申し上げたい。

以下に、「講演会」の要旨を報告する。

講演会「横浜市が求めている教員像」要旨 灘邊 憲司 先生

前半では、灘邊先生ご自身が教員を志された動機や、教職について後に経験されていったことが、語られた。

先生は、福岡県のご出身。2 度の転校を経て、小学 6 年生のときに横浜に来られた。中学時代には、部活の先生との出会いがあった。その先生は、宿直の夜学校に泊めてくださったこともあるし、校舎内で自由に遊ばせてくださったという。

神大在学中は、出身高校で 2 年間、部活のコーチをつとめた。その経験から、中学の部活の

指導ができる教職を目指そうと思った。

はじめに赴任したのは、埼玉県の小学校だった。その後、横浜市の中学校に移り、社会科を教えることになった。

家出した少女が学校へ訪ねてきたときに話してくれたことから、多感な生徒にとって、教師の一言がどんな重みを持つものか、感じさせられる経験をした。そんなこともあり、生徒指導の専任になった。

また、別の中学校では、学校生活の場面で、必ずどの生徒かを主役に立てる大切さを感じて、実行するようにした。

このような、先生のお人柄に触れるお話の後、ご講演の後半では、横浜市の教員採用の実際や、そこで重視されるポイントについて語られた。また教員に求められている姿勢や、仕事について後の研修についても、話された。

横浜市の一般の教員の選考は、一次試験と二次試験がある。

一次では、教養と専門に関する筆記試験と、面接がある。後者では、集団作業を通して、受験者の人柄・性格・態度・意欲などの人物的側面を見る。

二次では、面接と論文が課される。面接は、受験者一人に採用側の委員は二人、生徒とのさまざまな模擬場面での対応について、問われる。たとえば、不登校の生徒が来たときにどうするか、タバコの問題にどう対応するか、など。ここでは、受験者の人柄が出ざるを得ないし、生徒の気持ちにどのように触れることができるか

が問われることになる。

教員という仕事は、大変である。教室での生徒との接触だけでなく、保護者や地域の要望にどのように応えてゆくかが問われるようになってきている。

教員研修の中には、企業に派遣されるものがある。夏季の三日間という短期の研修のほかに、ある企業で丸一年間働くという形もある。そこでは、接客などが重視されるので、言葉遣いがきちんとしていたり、保護者への理解力がつくという成果が見られている。このような研修は、今後ますます重視されてゆくであろう。

教員に、教育への使命感や、子どもとかかわる姿勢、自分自身も高めてゆく態度などが求められることは、昔も今も変わらない。生徒とかかわりや言葉のやりとりの中で、絶えず自分を見つめ、変えるべきところは変えてゆく姿勢が必要である。

そのようなことを考えて、採用試験では、筆

記に加えて、受験生の、それまでの経験を含めた人物そのものが重視されるのである。

では、受験を目指す者は、今何をすればよいのだろうか。それは、今その人がしていることに、一所懸命打ち込むことである。そうしてこそ、その人は学び、成長することができるであろう。

以上のご講演の後、フロアーとの質疑応答が行われた。

これから教職につこうとしている学生たちからの感想や質問、長年教職にかかわってこられた先生方からの、感慨や現状への疑問などが、次々と発言され、灘邊先生もこれに答えながら、さらに内容を補足するお話もしてくださった。

時間に限りがあるのが残念であったが、「講演会」終了後、席を変えて「懇親会」が行われ、にぎやかなひと時が持たれたことを付け加えて、報告を終わる。